



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本の動物園来園者の動物観に関する研究：来園者の娯楽の種類と変容に着目して〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	平, 侑子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第13983号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78330
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yuko_Taira_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：平 侑子

学位論文題名

日本の動物園来園者の動物観に関する研究

—来園者の娯楽の種類と変容に着目して—

本論文は、日本の動物園における来園者の動物観に着目し、そうした動物観が娯楽とどのように紐づいて構成されてきたのか、そして時代によってどのように変容してきたのか、という2つの研究課題を設定し、緻密な文献調査・事例分析を通して論じたものである。具体的には、動物園における娯楽を、動物園側が提示する「レクリエーション」と、来園者側が支持する娯楽の2つの観点から明らかにしながら、民衆娯楽論と見世物に関する文化史的研究および記号論的研究の視点から、上記課題に沿って考察を行った。以下、章立てに沿って概要を記す。

第1章では、本論文の社会的・学術的背景、目的、研究方法および研究の視点、論文の構成について述べた。

第2章では、動物園の機能の一つである「レクリエーション」がどのような経緯で設けられたのかを、大正から昭和初期における動物園論者の言説と民衆娯楽論を参照しながら明らかにすることを試み、当機能により期待される動物像を示した。結果として、自然の中で日光を浴び、動物を見ながら癒されることで、慌しく単調な生活のなかで蓄積された心身の疲労を回復することが動物園の「レクリエーション」の意図するところであり、それに準じた動物観とは、動物を人々に都市から離れたことを想起させるための「自然」の一部として捉え、癒しを与える存在として期待するものであると結論づけた。

第3章では、近世の動物見世物の様相を、ラクダの事例と共に示し、見世物に関する記号論的研究において示された「視覚のカタストロフ」と、文化史的研究から抽出した「境界性」という2つの概念の整理を行った。すなわち、「視覚のカタストロフ」とは、見世物のメカニズムにおいて最も重要な概念であり、人々が構築してきた文化や知らず知らずのうちに自明だと思い込んでいた常識を揺さぶるような衝撃を意味する概念であるとした。また、「境界性」とは、観覧者自身と、彼らが対峙する対象、本研究で言うなら人間と動物を心理的に分け隔てるものであるとした。

第4章では、動物園における来園者の娯楽として、3つの形態を示した。1つ目は、動物園黎明期のオランウータンに見られる近世の動物見世物的な楽しみ方、2つ目は1930年代から1970年代頃までに流行した動物の演芸、3つ目は近年顕著に目立ってきた動物園常連による個体を見守る行動であり、それぞれの娯楽の形態について新聞記事・雑誌記事・児童向け著書・写真本などをもとに詳述した。1つ目については、近世の見世物が衰退した明治後期、上野動物園にはオランウータンを中国の霊獣「猩々」と捉えて現世利益を求める人々が押し寄せていた様

子を示した。彼らのオランウータンの見方は近世の舶来動物と類似点が多く、近世の動物見世物を楽しむ名残を、設立まもない動物園で確認することができた。2つ目の動物園の演芸は、1910年代から30年代にかけての動物園の大衆化・娯楽化を背景に、猛獣の演芸を取り入れて発展してきたサーカスの影響を受けながら行われるようになったと考えられた。本論文では、その先駆的かつ代表的な事例として、天王寺動物園のチンパンジー「リタ」を取り上げ、彼女の芸およびそれに対する人々の反応を詳述した。リタは人間の服を着て、自転車や竹馬に乗り、人間のマナーに則って食事をとるなど、巧みな擬人化芸によって大きな話題を呼んだ。人々は芸を披露するリタの様子があまりに人間と同じであることに驚き、中にはリタに対してひな人形や振袖を贈るファンもいた。リタの登場をきっかけに、全国で芸が出来るチンパンジーを導入する動きが生まれ、また、チンパンジーのみならずゾウやゴリラ、アシカなどの演芸も行われていた。しかし、動物愛護および環境保護の機運が高まったことが影響し、1970年代を境に動物の演芸は大幅に減少していく。3つ目は、近年増えている動物の「個」を楽しむ姿勢である。リタのような芸ができるスター動物ではなく、幅広い動物にファンがつき、個体のエピソードや性格を知りながら、足しげく動物園に通う人々が増えている。彼らの中には個体が好きな玩具や果物等を差し入れたり、個体が他県の動物園へ移動すれば、自分もその個体を追いかけて他県まで会いに行ったりする人もいる。彼らは性格やエピソードを把握しながら個体の日々を追いかけて、後世に血筋が繋がっていくようお願いながら動物を見守っていることを示した。

第5章では、総合考察として第2～4章において示した来園者の娯楽をもとに、研究課題(1)「来園者の動物観はどのような娯楽に紐づいて構成されるのか」および(2)「来園者の動物観は、時代によって変容しうるのか。変容するのであれば、それはどのような変容なのか」について論じた。1つ目の研究課題に対しては、民衆娯楽論における娯楽の主体に関する議論を用いて考察を行い、動物園における2種類の娯楽、すなわち動物園側から提示されたレクリエーションと、民衆自らが支持した娯楽の関係性を明らかにした。前者は、来園者の休養・回復を狙いとしたものであり、民衆娯楽論において説明された管理・教化的な娯楽の性質と類似していた。一方、後者は再生産という目的から離れた積極性・社会性を有した民衆による娯楽の性質に類似している。これらの娯楽が来園者の動物観へと還元される際、両動物観が互いに影響を与えあい、緊張関係を保ちながら併存する構造を示した。研究課題(2)の「来園者の動物観は、時代によって変容しうるのか。変容するのであれば、それはどのような変容なのか」に関しては、特に来園者が主体的に支持する娯楽の中では変容が認められると結論付けた。具体的には、動物を見るにあたって「視覚のカタストロフ」を求める姿勢が、動物園黎明期の近世動物見世物的な楽しみ方、さらにリタに代表される動物の演芸において確認できた。しかし、現在の動物園常連による「個」への観察行動は、地道かつ長期的に動物の「個」を追いかけるもので、そこに「視覚のカタストロフ」を求める姿勢は基本的には見られない。「境界性」に関しては、1920～30年代の早い段階では近世の見世物同様、動物を神秘的かつ異界の存在として捉える様子が見られた。これは動物を、自分とは異質な存在、すなわち心理的に「境界」の外側に配置するような存在として認識していたと解釈できる。一方、それと入れ替わるように現れた動物の擬人化の芸は、動物を人間と同質化して楽しむものであった。彼らの動物の見方は、動物学によって設定された人間と動物間の「境界」を曖昧にするものである。この両者の「境界」混乱の仕組みは、動物の演芸が減少して以降も子ども動物園において保持され、その後近年の動物園常連による動物の楽しみ方にも引き継がれていると考えられる。動物園常連は、リタにしたようなあからさまな擬人化はせずとも、動物に共感や理解を示す形で両者の「境界」を曖昧にしていると考えられた。

以上を総合する形で、第6章では、研究のまとめおよび今後の課題を提示した。